

草の芽句会たより

NO,95
28,7,7

飛石を残して一面夏の草
思い出の通りへ曲り夏の城
範子

短冊のうちわ飾りや城の門
散り残る今年の合歡の花に会う
純子

水をやる小さき虹の生れけり
シャッターの下りる町中星祭り
禮子

予後の身を気遣う嫁と初夏の旅
朝露の句を書き留めて旅終わる
剋子

厳しさを増して来にけり半夏雨
町中に植田一枚ひっそりと
文子

あじさいの雫ぼとりと空虚かな
日の昇り眠けざましの蟬の声
貞子

梅雨に病む季寄せ経本枕辺に
長梅雨の明けし病窓讃岐富士
貞

夏草生ふ古井戸の木杵くずれをり
父の日に送くり来し山査子青き実の
節子

出席者 馬場 吉崎 森 小山
投句者 大黒 真鍋 川原 氏家



朝から猛暑である。今日は七夕。大手門を潜ると見上げるような笹飾りが。小さなうちわの短冊が青空に揺れている。今やうちわは煽ぐためではなくなくなった。事務所ではさまざまなお札のうちわが作られていて観光客への売り込みに余念がない。職員のアマリの説明上手と熱心さについて買ってしまった。切手を貼れば即投函できるとか。こんなうちわの便りを貰うのも嬉しいことである。咲き残る合歡の木陰でひと休み。一面のしろつめ草に濠の風が渡る。最近、惰性でなんとなく句をつくっている自分に気付く。城山にはいつも新しい発見があったはず。ささやかなものにも目を留めていたことを思い出したい。次回は八月、お盆月である。暑さも一段と厳しくなるけれど、大勢の参加を期待したい。